

ゲスト○プロサッカー選手

# 小笠原満男氏



**先輩たちが  
積み重ねた歴史から、  
いまの勝利がある**

◎今回は、住友金属工業の蹴球団を前身とするJ1クラブチーム鹿島アントラーズでキャプテンを務める小笠原満男さんにお話を伺いました。

**サッカー選手である前に  
人として手を差し伸べたい**

——被災地岩手のご出身で、震災直後に現地に入られました。

自分が生まれ育った場所がああいうことになって、サッ

カー選手である前に、とにかく人として何か手を差し伸べたいと思いました。ただ、現地に行ってみると食料も衣類もないし、赤ちゃんのオムツやミルクもない。避難所に行っても親兄弟、家、車、ぜんぶなくなりました人たちがばかりで、どう声をかけたらいいかわからないんですよ。大丈夫ですかって言っても大丈夫なわけがないし。

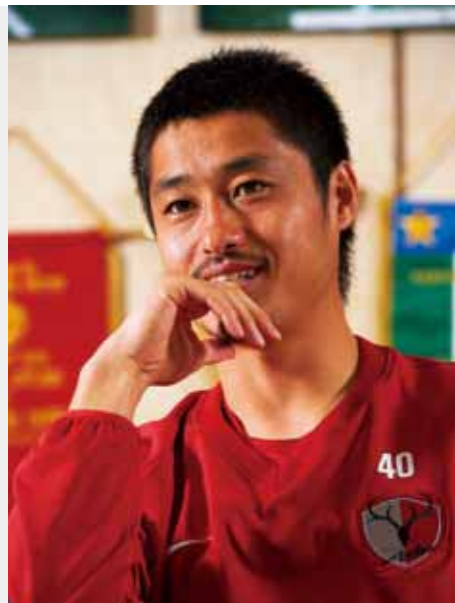
でも、そうやって立ちすくんでいた僕を「ここに来ていいの？」って逆に心配してくれたり、「試合楽しみにしてるからね」って声をかけてくれたり、それがすごくうれしかったですね。最初はとにかく足りないものを届けようとしたんですが、やっぱり限界がある。じゃあ自分に何ができるだろうと思ったとき、選手としてサッカーでいい結果

プロフィール ●おがさわら・みつお

1979年（昭和54年）岩手県生まれ。1998年に鹿島アントラーズ入団。以来、2000年に国内タイトル3冠を達成するなど、チームの中心選手として活躍を続けている。日本代表としてFIFAワールドカップ2002年日韓大会、2006年ドイツ大会に出場。2009年Jリーグ最優秀選手賞。東日本大震災発生後は、東北やチームの地元・茨城などで積極的な支援活動を続けている。



被災地の子どもたちと練習試合をして交流  
 (写真左)2012年1月6日岩手、  
 (写真右)2012年1月7日福島にて  
 (提供:東北人魂事務局)



# 東北人魂

を出すことでも喜んでもらえるんだとわかった。今もあ  
 ときの東北の皆さんの声に後押しされてプレーしている部  
 分はすごくあります。

——東北6県出身のJリーガーで「東北人魂プロジェクト」  
 を立ち上げ、被災地のサッカー少年少女の支援もされてい  
 ます。

被災地でサッカーをやっている子たちが、家も、場合に  
 よっては親もなくして、スパイクもボールも流され、サッ  
 カーを続けられない状況だと知って、なんとかしたいなと  
 思って立ち上げました。さすがに家は買ってあげられない  
 けど、サッカー用品は届けることができるし、自分たちの  
 試合に無料招待したり、子どもたちと練習試合したり、と  
 いった活動を続けています。釜石製鉄所の松倉グラウンド  
 でも子どもたちとサッカーをしました。今後も新日鉄の皆  
 さんとも協力し合うことができればいいですね。

この活動をしていて一番胸に響いたのが、子どもたちに  
 「サッカーががんばれよ」と声をかけたら、「がんばりたいけど、  
 俺たち練習する場所がないんです。がんばりたくてもが  
 ねれないんです」って言われたこと。グラウンドには仮設  
 住宅が建ってるから、練習する場所がない。でも、目の前  
 で人が流されるのを見た子もいるだろうし、仮設暮らしで  
 ストレスもいっぱい抱えているのに、それを発散させる場  
 がないっていうのは、本当につらいですよ。子どもたちが  
 思いつき走り回る場をなんとか提供できないかかって  
 ずっと思っています。

## いろんな遊びが強い体をつくる

——子ども時代からサッカーひと筋ですか？

いや、何でもやりましたよ。野球も鬼ごっこもやったし、  
 川でも泳いだし。サッカーは週2、3回。小学校のコーチか  
 ら「サッカーがうまくなりたかったらサッカーだけやって

ちゃだめだぞ」って言われて、当時は意味がわからなかつ  
 たんですけど、いま考えれば木登りだって体幹トレーニング  
 だし、体を鍛えるにはいろんな遊びをしたほうがいい。

先日、合宿から帰ってきましたが、30歳過ぎの選手は誰  
 もケガがなかったのに、10代とかの若い子たちほどケガし  
 てる。なんでかなって考えてみると、子ども時代の環境な  
 んですよ。いまは遊ぶ場所も少ないし、家でゲームした  
 り、危ないからって親が車で送り迎えするでしょう？ 昔  
 は子どもたちだけで自転車や遠出したり、暗くなるまで外  
 で走り回って遊んでた。それって子どもの成長にすごく大  
 切なことだと思います。

——そのころからプロを目指していたのですか。

たしかに小学生のときに将来の夢はサッカー選手って書  
 いてましたけど、当時はJリーグもなくて、じゃあどうす  
 るのって言ったら、ブラジルに渡って、みたいな夢(笑)。  
 漫画の世界ですよ。Jリーグができたのが中2で、プロに  
 なることを本気で考えたのは、ぎりぎり高3のとき。クラ  
 ブからオファーがきてからですね。

そのとき4チームくらいから話をいただきました。中に  
 はポジションを空けて待っているというチームもありまし  
 た。鹿島アントラーズは強豪だったし、ここでレギュラー  
 ポジションを勝ち取れば日本代表も見えてくると思って、  
 一番高い壁だけど、やっぱりここで勝負しようって決めま  
 した。

ただ、最初ほとんどでもないチームに来たと思いましたが  
 (笑)。今の監督のジョルジーニョがまだ現役で、彼は元ブ  
 ラジル代表だし、スタメンはみんな日本代表クラス。紅白  
 戦の残り5分でやっと出してもらえても、全然通用しなく  
 て、いつもクソツと思ってました。でも、ここでがんばら  
 ば間違いなく成長できるし、次が見えてくるという感触が  
 あったので、すごくやりがいがありましたね。





提供：オフィス・プリマベラ

2012 Jリーグプレシーズンマッチ・水戸ホーリーホック戦（2012年2月25日）

——うまくなるためにどんなことを意識していましたか。

ほかの人たちがどういう動きをしているか、それはよく見てきました。どの時間帯に、どのポジションで、どんなプレーをするか。本人に聞くのは簡単なんですけど、なんかそれってくやしじゃないですか。だからいろんな人をよく見て、あえて理想像はつくらず、少しずつ人のいいところを取っていく感じですよ。

——メンタル面はどうでしょうか。

元々深く考え込まないタイプですけど、絶対にネガティブには考えないですね。人によつてはこのシユート外したかどうかで考えるけど、僕はこれを決めたらヒーローだつて考える。その発想のほうが好きですね。失敗してもそれはそれで受け入れて、じゃあ次どうしたらいいかって考える。そこが一番大事なんです。ネガティブになつていいことつて一つもない。チームでは僕も年長者になりましたけど、上の人間がびくびくしてやつてたら、必ずそれつてチーム全体に伝染しますから。

### 若手はほめて伸ばす

——現在、キャプテンとして若手にはどんな接し方をされていますか。

僕が19、20歳のときは先輩たちからものすごく怒鳴られました。そこもつと寄せろ、さぼるな、あと一歩右だとか。今

の若い子たちにそれをやると怒られ慣れてないからだめなんです。ね。「戻つてこい」つて怒鳴るんじゃないって、戻つてきたときに「いいぞ」つてほめる。それで落ち着いたときに、もつとこうしたほうがいいつて話をするほうがうまくいく。たしかに怒鳴りたくなることもあるんですけど、言い方とタイミングで響き方つて違うから、そこは意識しています。

——心に残っている先輩の言葉は？

いろいろありますよ。例えばJリーグのデビュー戦、18歳のとき。前半10分でケガ人が出て急遽出ることになつたんです。ふだんはうるさく言われてましたけど、当時キャプテンだつた本田泰人さんが「ミスしたら俺らが取り返すから、おまえはバランスなんて気にしないで好きにやれ」つて言ってくれた。それでのびのびといいプレーができた。すごくありがたかつたし、なんて器のなかいい人だろうつて思いましたね。デビューする選手はただでさえ不安と緊張でガチガチだから細かいことを言つたら持ち味が出ないんです。僕もそういう場面では本田さんと同じ言葉をかけるようにしています。

——アントラーズは常勝チームです。強さの秘けつは何ですか。

僕らは今いる選手とスタッフだけで勝つてるわけじゃありません。アントラーズにはジーコや先輩たちの歴史の積み重ねがある。サッカークラブの歴史スタイル、ジーコはファミリーつて言いますけど、チームが一丸となつて、試合に出られなくても誰一人グチを言わないし、練習だつて手を抜かない。そういう土台を歴代の先輩たちが作ってくれたから、いま勝てるんです。

アントラーズはタイトルを1個取つただけでは全然足りない。サポーターだけでなく僕ら自身、当然そう思つてるし、優勝カップを掲げても、ロッカールームに帰つてきたら「次の試合も取りに行くぞ」つてみんなから声がある。「この大会で勝つてよかった、満足した」なんて誰も言わない。それが僕らの強さなんだと思います。



提供：オフィス・プリマベラ

2011年、4度目のナビスコカップ優勝。93年のJリーグ創設以来、鹿島アントラーズ15回目のタイトル獲得となった。

——最後に今シーズンの抱負をお聞かせください。

やっぱり全タイトル制覇です。2000年にJリーグ、天皇杯、ナビスコカップと3冠を達成したときに、すごい充実感がありました。優勝つてやっぱりいいですよ。だつて大の男が何万人の観客の前で涙流して抱き合うなんてふつうないし、選手だけじゃなく、サポーターをしてくれるスタッフみんなの苦勞が報われる。観客との一体感もすごい。あの感動を何度でも味わいたいですね。